THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第14号
広報委員会発行

関西大学通信

大阪府吹田市山手町3丁目
関西大学広報委員会

〝蜂の巣遺跡〟を発見・発掘

水没予定地から縄文土器

土器、ヤジリなど約百点
えん堤に狭まれた台地

遺跡が最初に発見された場所は熊本県阿蘇郡小国町浅瀬。そこは松原ダムの貯水が始まると水没する松原・下筌両ダムえん堤にはさまれた台地で、津江川に大きく突き出て、三方は川になっており、後ろは谷川につづく山地になっている。

この地域を調査していた綱干善教助教授（文・考古学）が、縄文時代のものと思われる土器の破片や矢ジリ、黒曜石の破片など約百点を見つけたもの。土器の破片は大きいもので八㌢平方、縄目の模様の上に沈線を引き、間隔を置いてすり消した模様（スリ消し縄文）や、突き刺した模様（突き刺し文）がついていた。破片の正面は黒ずんでおり、厚さ一㌢足らずのかなり精巧なもので、縄文後期につくられたと推定される。そのほか、魚労用の網のオモリに使ったらしい上錘（どすい）、黒曜石のヤジリやナイフらしい長さ八㌢、幅二㌢ほどの黒曜石なども見つかった。

調査団は、この遺跡を『蜂の巣遺跡』と呼ぶことにし、地形的にも似ている対岸の大分県日田郡大山町貫見（ぬくみ）とあわせて、文化庁に発掘調査の許可申請をした。

収穫だった発掘調査

十月一日から『蜂の巣遺跡』の発掘調査を開始した。発掘は大山町貫見台地の十三地点、小国町浅瀬台地の六地点を中心に行なわれ十四日に予定を全部終了した。

この発掘調査では、縄文期の遺物だけでなく遺物の生産過程や生活の一端までうかがい知ることができる資料を多数収集し、大成功だった。とくに、

（一）縄文早期（約八千年前）と思われる山形押型土器片を筆頭に晩期（約三千年前）の黒色研磨土器までを発掘した。

（二）黒曜石の石鏃（せきぞく・ヤジリ）の現物を見つけ、また、その原石が遺石周辺から産出することがわかった。

（三）炉跡から何かを摺ったと思われる平らな石が出た。

（四）漁労用の網のオモリに使った石（両端にクボミをつけ、糸を結びやすくしてある）を発見した。

（五）浅瀬の遺跡では藤原頼通らが摂関政治を行なっていたころの宋銭『治平元宝』（一〇六三―七四年、北宋時代）一個が見つかった。

などは大きな収穫だったとされている。

豊かな学術的意味

これらの発掘結果から示される学術的な知見は非常に多く、そのすべてが貴重なものである。

（一）貫見、浅瀬台地には七・八千年にさかのぼって人が住んでいたことがわかり、この遺跡を載せていなかった文化庁の『全国遺跡地図』は書きかえられなければならない。

（二）同じ遺跡で縄文早期のものと後期のものとが見つかっているところから、古代文化の時間的流れをうかがい知ることができる。

（三）米粒を並べたような模様の長円押型縄文土器とジグザグを重ねた模様の山形押型縄文土器は、これまで製作時代が違うのではないかという説もあったが一か所から出てきたことは、注目される。

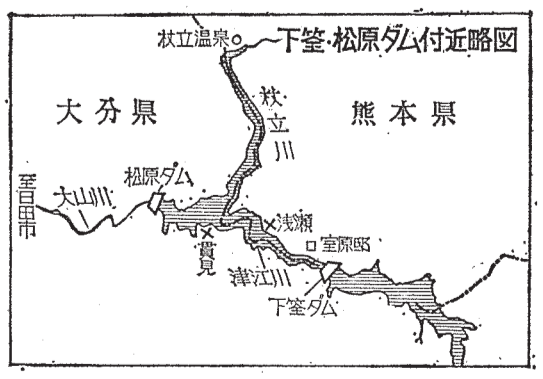
（四）石鏃と同質の黒曜石が遺跡周辺にあり、また遺跡からもその原石や半加工石が見つかったことは縄文時代の人たちがどのようにして石器を造ったかを明らかにするものである。

（五）炉跡から出た平らな石の使途は不明だが、熱い石の上で何か食べものを摺ったのではないかと想像させる。

（六）漁労用の網のオモリにはクボミをつけた石のほか土器片も使われており、当時すでに廃物を利用する〝生活の知恵〟があった。

（七）小国中学校建設工事の時に出土した大柄の土器片多数が同校に保存されていることがわかったが今回の遺跡調査と相まって、土器の地域差、文化系列などを把握し筑後川上流域の遺跡のあり方をさぐる重要な資料となる。

調査団長の桜田教授は「あの地域に考古学的、歴史学的に意味のあるものは〝何もない〟ことを確認したうえで水没させるのが〝総合〟調査団の責任であると思い、専門家に参加してもらったところこのような貴重な発見を生み出すことになり、望外の喜びです。われわれは総合調査を通して他の領域の研究を尊重する気持をますます強くしてきましたが、とくに、この遺跡を発見された専門家のけい眼には敬服しています」と語っている。



下筌・松原ダム総合学術調査団の成果

下筌（しもうけ）・松原の両ダムは建設省が筑後川上流の大山川、津江川につくっている多目的ダムであるが、このダム建設に対する地元民の反対闘争は〝蜂の巣城〟と呼ばれるトリデによって全国的に知られている。本学では昭和四十二年から、この下筌・松原ダム問題を法的、経済的、文化社会的、自然科学的な観点から多角的に調査研究するための『下筌・松原ダム総合学術調査団』を編成し毎年夏休みを利用して現地調査を行なってきた。

調査は五年計画で進められているが、現在、調査団は、広瀬指三学長、中谷敬寿、末永雅雄両名誉教授を顧問とし、桜田誉教授（法）が団長となり、全学部にわたる教員約三十名の調査団員に加えて、学外から数名の研究協力員の参加を得て、構成されている。

四年目にあたる今年度の現地調査は七月末から八月初にかけて実施されたが、その際、やがてダムの底に没することになっている地域で縄文時代の土器が多数発見され、遺跡があることがわかった。『蜂の巣遺跡』と命名されたこの遺跡は、十月に特別調査団によって発掘されたが、その結果、従来の考古学・歴史学の学説を越える新発見が続々とあらわれ、大きい成果をあげることができた。

【三面に関連記事】

地元町民達も全面的に協力

蜂の巣遺跡の発見と発掘は朝日毎日、読売の全国版をはじめ地方版にも再三とりあげられ、西日本新聞や大分合同新聞などローカル紙も逐一その経過を報道した。地元の大山町と小国町では大変な評判で、大山町の広報紙〝暁鐘〟十月号の一面トップを飾ったうえ、十月十日の「体育の日」に行なわれる〝歩け歩け運動〟のコースにもなって、七百人近い町民が見学に押しかけた。

また大山町では町をあげて発掘に協力することを決め、十月三日から毎日十七人の町民が交代で無料奉仕を買って出て、発掘調査の指揮にあたった綱干助教授らをよろこばせた。

グラウンド過密利用の緩和へ
体育館裏用地の整地成る

七月末から体育館の北東裏の造成・整地工事が行なわれていたがこのほどその工事が終り、一万八六六〇平方㍍の広さをグラウンドとして使用できるようになった。これにより、正課体育の授業をはじめスポーツ諸活動のためのグラウンドの過密利用状態がかなり緩和されるものと期待されている。

整地なったグラウンドで楽しむ学生たち

一挙1.7倍の広さに

本学の運動場の面積は、第一、第二の両グラウンドを合わせて約二万七千平方㍍であるが、これで正課体育の授業やスポーツ活動を十分に行なうには手狭の状態にあった。そのため、かねてよりグラウンド面積を拡大することが望まれていた。今回の整地工事によって一挙に七〇％増の約四万六千平方㍍になったので、この広さを有効に利用するならば、従来のようなグラウンド利用の過密状態はかなり緩和されるものと考えられる。

正課体育を中心に利用

新グラウンドの正式の名称はまだ決っていないが、その用途は主に正課体育の授業に重点がおかれることになっている。十月中旬に一応の整地を終えた後、十一月下旬には周囲の整備や芝の植え付けも終ったので、樹木や芝生に囲まれて豊かな緑のなかで体育の授業を行なえる時が来るのもそう遠くないだろう。

この工事は、総合グラウンド用地一部造成工事として行なわれたものであるが、総合グラウンドをつくるためには、なおかなりの土地を買収する必要があり、また造成工事その他に約三億円がいると推定されており、現在の本学の財政ひっ迫状態からみて、非常に難かしいことは否定できないようである。

なお、このグラウンドで体育会主催のソフトボール大会が十月二十八日から十一月十四日まで開かれ、教職員・学生でつくられた九十六チームが参加して熱戦をくりひろげたが〝反応工学チーム〟が見事優勝して学長杯を獲得した。

遺跡から出た石でケルンを建てる
発掘調査を記念し

調査団は蜂の巣遺跡の発掘調査を記念し「若い人たちに文化財保護の意識を持ってもらおう」と、宿舎の大山町営ユースホステルの前に、ケルンを建てた。このケルンは、発掘で出土した黒曜石、安山岩などを使った高さ約一㍍、直径約五〇㌢の可愛いらしいもの。

千里眼

汚れた大気の下でも、秋晴れの気候は、やはり気持よい。この号が発刊される頃は、秋もすぎ、一九七〇年の最後の月に入っていることだろうが、われわれは、その時何を考えているだろうか。

年末の残り少ない日数をかぞえ年頭に計画したもののうち、達成できたものと、できなかったものについて考え、そして、おそらく実現できなかったものの多さに気づき落胆していることだろう。人の一生というのも、こうした失望と焦燥のくりかえしなのだろうが、そして、この失望と焦燥の故に、一歩でも前進しようとするエネルギーで生まれてくると、自らを照めるほかはないのだが、それにしても無かなことである。

きわめて個人的な反省を含めた感想を述べると、この種の失望と焦燥の程度は、年令と逆の相関があるようだ。私の学生時代、もう遠い昔のことになったが、今から考えると、いつも自分に失望し焦燥していた。しかし、この年になって自己をふりかえってみると、多少の焦りがあるものの、今年もそうだったかというあきらめがそれに続いてしまう。悲しいものだ。

今の学生諸君はどうなのだろうか。世代論が流行し、世代間の断絶が語られているとき、古い世代の私が、新しい世代の意識を語りようがないが、日頃接する学生諸君の印象は、どうも私の学生時代と違うようだ。

就職も決まり卒業の見通しもついた四年次生は、あと数カ月の大学生活をどう過そうと考えているのだろうか。外国語の別名をつけ確率論の実習をよぶ四人の集団行動もよいだろう。悪いというのではない。しかし、あと何十日かで失望と焦燥さえも忘れさせられるかもしれない世界に入るのだ。

失望せよ、焦れ！　それとも、失望と焦燥さえもが、現代の社会では意味を持たないと考えるべきなのだろうか。

（T）

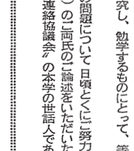
室原文庫設立へ向けて

下筌・松原ダム総合学術調査

図書・資料を関大へ
とくに貴重な訴訟関係
＝室原氏の遺族が譲り渡し＝

昭和三十二年から十三年間、ダンボール箱約五十箱分にもなる室原闘争に生きてきた〝蛇の巣〟と呼ばれた室原地区の住民の意識調査、〝室原知事〟室原知一郎氏の死亡、室原闘争の敗北、闘争と運動者の両に和解が成立したが、このたび遺族から室原氏所蔵の図書・資料を一括して関大へ譲り渡したいという申し出があり、関係者を驚ろかせている。

室原氏は生前にわたる反対闘争のために、およそ目的外の活動に走ることも関係すると思われる図書・資料をもらさず入手しようとされた。それが現在、法律、経済、社会、歴史、土木、電気などの分野にわたり、内容の専門書から一般の書籍で、七十メートル程度の



ダンボール箱約五十箱分にもなる訴訟関係資料は、地元をはじめ全国の関係者が最非手に入れたいと考えていたものであるといわれる。それが、一括して寄せられることは非常に価値があるといえよう。

今年度の現地調査の折、法律、経済、工学関係の調査資料リストは、調査団員の手によって作成されていたが、今後、完全なリストを作成したうえで、譲り受けられることになっている。

多面的にダム問題へアプローチ
42年から5年計画で現地調査

＝関西大学下筌・松原ダム総合建設に伴う学術調査団＝は、ダム建設による現地調査を行ない、三年次以降にはさらに歴史、社会学、生物学関係の調査が加わって、約十名の大学院生等学部学生の補助調査員とともに、下筌・松原ダムの水没予定地や周辺地域ほか関係諸国や官庁・町役場などで調査してきた。三年目を迎えた昨年の現地調査は約約のために規模を縮小せざるをえなかったが、継続されて来た。そしてこの努力が今年度の調査報告書の発見と疑問にもつながっているといえよう。そのほか四十三年調査では、カワニナ（きれいな淡水に生む巻貝）〝の新種を発見し、また今年度は遺長時代（約三〇年前）遡

初年度の昭和四十二年には法学、経済学、工学関係の研究班が構成されていない。二年次以降には関係の調査が加わって、約十名の大学院生等学部学生の補助調査員とともに、下筌・松原ダムの水没予定地や周辺地域ほか関係諸国や官庁・町役場などで調査してきた。三年目を迎えた昨年の現地調査は約約のために規模を縮小せざるをえなったが、継続されて来た。そしてこの努力が今年度の調査報告書の発見と疑問にもつながっているといえよう。そのほか四十三年調査では、カワニナ（きれいな淡水に生む巻貝）〝の新種を発見し、また今年度は遺長時代（約三〇年前）遡

調査は法学、〝歴史、考古学、社会学、工学、生物学の八班究班で構成されているが、班相互の連絡調査団のチーフリーダーによって総合研究の実を挙げる努力が続けられている。

文学部

▽新しい人事
学生部長代理に広田三平助教授

去る（10月一五日開催）学法学部助教授藤本豊嗣君がCAの為の成績担」「裁判官の独立」等の論文を発表、特に「権力分立論」については通説的考察」および「アメリカにおける三一日大阪府泉南市に生まれ、同二九年四月関西大学に入学、同三三年に法学部法律学科を優秀な成績で卒業、直ちに大学院修士課程、同博士課程へと進み、同三六年四月人物、学識ともに極めて優秀なる者認められて法学部助手となり、同四〇年四月講師に、同四三年四月助教授と昇進されました。

同君は、中谷寿博士、渡辺宗太郎博士のもとに公法学とくにフッフ・ボールの選手として活躍し、学問面においても地道研究を重ね、教授についてからは、サイクリング同好会の顧問部員

られた。ここに若い日の同君を偲び、その御冥福を祈りたい思いです。

故藤本君は、昭和一〇年七月栃分立論」など秀れた研究論争っているのを見た者はいい程同二九年四月関西大学に入学、同三三年に法学部法律学科を優秀な成績で卒業、直ちに大学院修士課程、同博士課程へと進み、同三六年四月人物、学識ともに極めて優秀なる者認められて法学部助手となり、同四〇年四月講師に、同四三年四月助教授と昇進されました。

同君は、中谷寿博士、渡辺宗太郎博士のもとに公法学とくにフッフ・ボールの選手として活躍し、学問面においても地道研究を重ね、教授についてからは、サイクリング同好会の顧問部員

文を発表せられ、将来を大いに嘱望されていたが、社有為な学問の進でなり惜しむ。

藤本豊嗣助教授の御逝去を悼む
法学部長　池垣定太郎

であります。彼に本当に内職外条の人であったと言い得ましょう。

昨年の大学紛争に深入りしては目的外学部に関与されず、学生部の設計や運路調査の判る、従来より希望者には各種資料の提供、自己自者にも提供されて来ました。

判断の参考資料に供していたが、我に進路・職業に関するいろいろな問題の相談が求められていることを考えて、そ

として後進のスポーツ振興に大いに貢献せられたのであります。

彼の人格は、常日の一致するところであり、未だかつて彼が人と争論を起こしたことは無い程の温厚実な人柄は、学問の道に対する厳正な態度、研究の依頼あるいは技術的相談に対する大学への希望など、いろいろと討議された。

大学学生相談室から

大学学生相談室では来訪学生の、相談内容の傾向や希望などを考えて、性格傾向や職種生活の設計や進路調査の判る、従来より希望者には各種資料の提供、自己自者にも提供されて来ました。

このように、故藤本助教授は教育・研究に熱心な学徒として、また演習・ゼミ運営の学生ことは、本学にとって誠に惜しまれて今にわかに逝去されたことであります。

つぎに、この運動はこの住宅上、小さい単位として個々の私立学校、大きい複合体としては、わが国の私立学校が一致団結して展開すべきであって、この運動は、国庫助成の名において何なそうとしているのであろうか、いや、大学とするものは国立、私立を問わない、その会計の運営と、その結果はあくまでも「ガラス張」

の上に公示すべきであって、これをもし「ヒモ付き」というのであれば、国庫助成の便途は、大学の自主性を損ない、学生の教育の充実を阻害することは明瞭であり、「ヒモ付き」というのは、「ヒモ」の中で公示すべきであって、中小企業的感覚で不明瞭、不明確なものとしてはならない。したがって、その受けた国庫助成の便途は、学生の教育の充実に使用されるべきであって、これをもし「ヒモ付き」というのは、「ヒモ」の中で公示すべきであって、中小企業的感覚で不明瞭、不明確なものとしてはならない。したがって、その受けた国庫助成の便途は、学生の教育の充実に使用されるべきであって、これをもし「ヒモ付き」というのは、

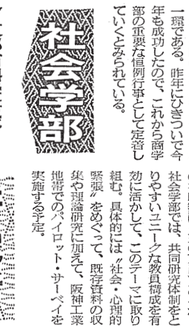
竹生島で同僚・学生とともに＝左端が藤本助教授

を迎えて皆一同としてやってくることの出来ない人材でありました。

キャンパス情報

▽広報委員の交替
秋山愛教授が辞任され、松本政治教授が文学部広報委員となられた。

▽教職員・学生懇談会開かる
商学部教職員・学生懇談会が、商学部主催・商学部自治会共催で、十月二十四日（土）、岩崎寺（長岡天神）で功裡にもされた。この懇談会は、昨年六月にはじめてもたれた商学部リーダーズ・キャンプを経験した第二回目のもの。クラス（ゼミ）委員および執行委員の学生六十名、教員二十名、事務職員二名がこれに参加し、午前十一時から午後六時まで、昼・夕食をともにして、熱心な討論をおこなった。
討論はO関西大学並の展望、②カリキュラムの改善、③全学自治会（学友会の再建）の三つを学研究会（特定研究）補助金が交付され「工業化の進展と社会構造の変質」というテーマで共同研究に取り組んでいる。これは「産業文クラブ」で開催した、テーマは「関西研究助成について」（後告者・青島商学部教授）と「貿易のシレーションについて」（来信者三商学部教授）であったが、ともに現在注目を集めている貿易問題を取り十分から大阪証券会館において、



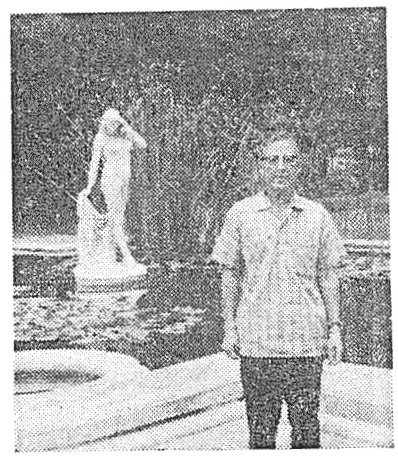
▽文部省科学研究費で共同研究を
日経二回教授を代表者とし社会学部教員をスタッフとする研究チームに、昭和四十五年度文部省科研費

▼経済・政治研究所・第三十回産業セミナー開かる
恒例の産業セミナー（第三十回）を十一月十三日（月）午後一時から大阪駅前第一生命ビル・好シンポジウム形式で三月上旬に開催の開催した。テーマは「公害」についてとしての問題」「関西大学教授」「関西大学教授」「開発の主要な問題」「関西の機構」「関西の産業」「明治における教育」「関西の産業」「関西大学教授」「関西の機構」「関西の産業」「関西の機構」「関西の産業」「関西の機構」「関西の産業

海外だより

南米の話題

社会学部教授　杉原　弘人


ブエノスアイレスの植物園で

佐藤訪米阻止で騒然としている東京国際空港をあとに中南米調査研究の旅に立ったのは昨年の十一月中旬であった。アメリカ、メキシコ、ペルーを経てブラジルのリオデジャネイロに到着、オスワルツ・クルーツ研究所に昆虫学者ロペス博士を訪問、サンパウロで毒ヘビの研究で有名なブータンタン研究所を見学し、十二月中旬、レシフェに向った。

◆ブラジルの東北地方

南米大陸が大西洋につきだしたところがブラジルの東北地方・ノルデステである。この地方の中心地レシフェは人口五十万、ブラジル第三の都会で、市内には二つの河が流れ、街は大西洋に面し、南米のベニスとよばれる近代的な街である。ノルデステは十七世紀より十八世紀にかけて黒人の奴隷の黒い手により白い砂糖がつくられ、レシフェはその中心都市として栄えていたが、十九世紀に入ってから次第と発展にとり残され、ブラジルの貧困地帯、過剰人口地域となり、ノルデステの貧困と社会不安の問題は全ブラジルの問題となってきた。一九五九年、東北地方開発委員会が発足、道路建設、エネルギー開発など社会的投資が行なわれ、また農漁業の近代化、工業の誘致も積極的に行なわれた。

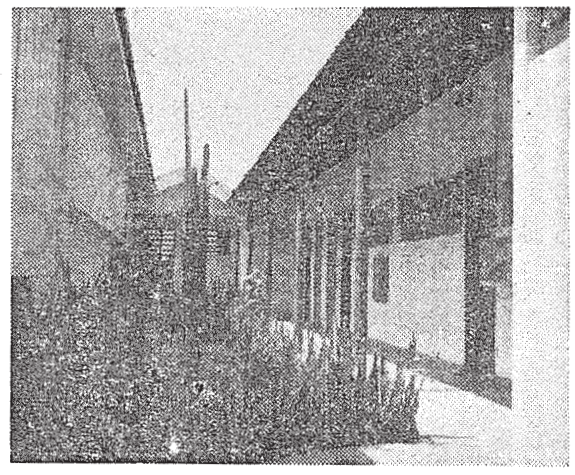
外国資本の導入には優遇策がとられ、日本からも弱電気工場、水産物加工工場などが進出してきた。

レシフェには日本の技術援助計画により、ドンペドロII世病院に熱帯医学研究所が一九六八年から開設され、慶応大学医学部より四名の医師、技術員が派遣されている。機械、器具も年間約三千万円程度のものが贈られている。ノルデステはマンソン住血吸虫の流行地であり、この寄生虫の撲滅と患者の治療、ブラジル人衛生技師への技術指導がこの研究所の任務である。マンソン住血吸虫は山梨県に分布している日本住血吸虫と同じ種類で、淡水産巻貝ヒラマキガイが中間宿主であり、巻貝より出た幼虫が皮膚から人体に入り、大腸の腸間膜に寄生し、赤痢様症状をおこす。

死亡率も相当に高いようである。

日本に留学していたマウロ博士の案内で研究所付属病院を見学し、高度の貧血と腹水で死を待つ患者の多いのを見て、この寄生虫がノルデステではいかに濃厚に蔓延しているかを知った。わが国では日本住血吸虫の予防撲滅が成功し、ほとんど患者が見られなくなっている現状である。この優れた医学技術と予防法により、ノルデステの患者を一人でも少なくし、少しでも流行地を縮少できるように研究所の日本人研究員の活躍されることを期待しつつ研究所より南国の太陽が容赦なく照りつける病院の広場に出た。

レシフェのドンペドロ二世病院

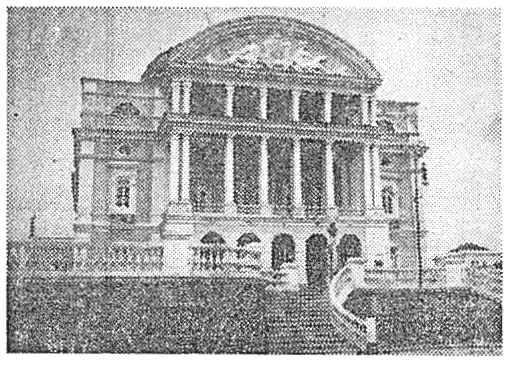

レシフェの熱帯医学研究所

◆アマゾンの中心都市マナウス

アマゾン河口のベレンより船で四日、空路で三時間のところにマナウスがある。私はレシフェの猛暑にすっかり弱ってしまい、ひとまずリオデジャネイロにもどった。リオは三八度のキリストの立像が天空にそびえるコルコバードの特有な円錐形の岩山ポン・デ・アスカーが何処からでも眺められる街である。ブラジル人は世界一の海水浴場であるというコパカバーナのモザイク模様の散歩道をあるいて、リゾートの海浜のつきるところに荒波という日本料理店がある。ここで久々の日本食でセルベッサを飲むと、レシフェでの疲労は吹きとんでしまった。十二月中旬、サントス・デュ・モン空港を午前八時に出発、新首都ブラジリアのジェット機形の市街を下に見て、数時間でアマゾンのジャングルを飛ぶと急に褐色の流れが見えてくる。

アマゾン河である。河に沿ってマナウスの市街を一周し午後三時、大粒の雨の降る空港に着陸した。南緯二二度のリオより南緯三度のマナウスまで北上したので暑さでボール遊びをしているだけで、計を一時間もどす。且つマナウスは雨季で五月まで続くという。アマゾン河は雨季の終る頃より増水し十月頃より減水しはじめる。増水期にはパナマより自由港であるマナウスに日本製のテレビ、ラジオ、カメラ、オートバイなどを三千トン級の大型汽船に満載して溯ってくる。

マナウスは五十年前まで、天然ゴムの世界唯一の供給地として栄えていたが、現在ではその地位をマラヤにとられて、衰微をつづけている。自由港になっているのも昔日の繁栄をとりもどすための一手段であろう。街の中心には一八九六年、建築資材の一切をヨーロッパから運んで、建造したフランス建築のテアトロ・アマゾナスが世界一流の俳優をパリよりよんで歌劇を演じた当時の姿でそびえている。劇場の周囲にはほとんど人かげもなく、子供が劇場前の広場で野球をしている。


マナウスのテアトロ・アマゾナス

マナウスのホテルより見たアマゾン河

◆ブエノスアイレスの掏摸

パラグァイの首府アスンシンの高温多湿からやっと解放されて、アルゼンチン航空でブエノスアイレスのアエロパルケ空港に一月のはじめに着陸した。花の街ブエノスアイレスといわれるだけに街のいたるところに花屋がありカーネーション、グラジオラスなど美しい花々が南国の太陽に照されて、鮮明に見え、目にしみ入るようである。この花はブエノスアイレスの郊外で邦人の人々が作ったものである。ブエノスアイレスには南米唯一の地下鉄が街の中心部を縦横に走っている。この地下鉄は第一次大戦頃に開通した古いもので車内はうす暗く、朝晩は相当に混雑する。私はこの地下鉄で海外旅行者の三種の神器、旅券、予防注射証明書、航空券を掏られてしまった。ところが一週間目に掏摸が地下鉄の事務室に返してくれたのである。ブエノスアイレスの掏摸は金以外はかならず返すと邦人の人達がいっていたことが本当であったので、私はすっかり掏摸君の仁義に驚いてしまった。

この事件でブエノスアイレスには予定より長く一カ月余滞在したが、その後、どの国でも味わうことのできない、すばらしい気分にひたり、楽しくタンゴをきき、アサード（肉料理）を食べ愉快な日々を過した。

◆トルヒヨとペルー肺吸虫

ペルーは五年ぶりである。パラックだった空港の建物は南米一の空港ビルに生まれかわり入国、税関の手続も以前と相違して、非常に簡略になっていた。このことでもアスタ・マニャーナの国からの脱皮に新しい軍事政権が努力している様子がよくわかる。街はほとんど変化がないがどの建物にもペルー国旗が立っていることと、通貨の下落に驚ろく。帰国後起った地震で相当な被害を受けたトルヒヨに二月中旬出かける。リマ空港をフオセット航空で出発し、大平洋岸を北上、約一時間で砂漠が緑の大地に変ったところがトルヒヨであった。二世で生理学を教えている歌野教授をトルヒヨ大学医学部に訪問、微生物学のミランド教授を紹介してもらう。ペルーには今世紀のはじめより肺吸虫症があることが知られていたが、この寄生虫は東洋の移住者が持ってきたということになっていた。一九六七年トルヒヨ近郊の肺吸虫流行地のネコから肺吸虫が発見され、このものが、ミランド教授と日本の肺吸虫研究者である九大の宮崎教授との協同研究で新種であることがわかり、ペルー肺吸虫と命名された。この研究でペルーでの肺吸虫症は以前から生息する固有の種類によるもので、東洋から移入されたものでないことが明らかとなり、東洋の移住者の汚名はそそがれた。現在、この寄生虫の生活史は不明で、この解明には日本とペルー両国の研究者の協力が必要である。私もペルー肺吸虫の第一中間宿主の研究に協力することを約束して、夜、おそくランサ航空のYS一一でリマに帰った。

◆キトの赤道モニュメント

ペルーを早朝出発したプラニフ航空のジェット機はエクアドルのキト上空を旋回するばかりで一向に機首を下げない。キトはボリビアのラパスについで世界第二の高地（二八五六㍍）の首府である。

雨季で霧が立ちこめ空港が発見できないらしい。四十分後やっと雲の切れ目から着陸する。少し足早に歩くと息ぎれがおこる。街はスペイン植民地時代南米の美術の中心地であっただけに美しい建物が多い。起伏した街に霧雨が降り、夏服よりない私は寒さに震えあがった。赤道モニュメントはキトより自動車で約二時間、荒涼としたアンデスの山あいの盆地に立っている。モニュメントを中心にして赤い線が0度0分0秒のところに引いてある。この線の上に立って運転手に写真を撮ってもらう。降りやんでいた雨が再び激しくなってきたので急いでキトに帰ることにした。

三月上旬、コロンビアの首府ボゴタでは国立大学が紛争のため、私立のハベリアナ大学医学部を見学、ロサンゼルス、ホノルルを経て、帰国したのは万国博開会の日であった。

昭和46年度入学試験の概要

昭和四十六年度の関西大学入学試験は一月三十一日（日）から、本学および地方の試験場で実施されるが、入試要項によりその概要を紹介する。

社会学部がトップ　一月三十一日から

来年度の入試も、例年通り、本学と地方の試験場で行なわれる。

本学試験は、第一部は千里山学舎で、第二部は天六学舎でそれぞれ行なわれるが、学部別の日程は次の通りである。

一月三十一日（日）	社会学部
二月一日（月）	商学部
二日（火）	法学部
三日（水）	工学部
四日（木）	文学部
五日（金）	経済学部

地方試験は、一月三十一日に全学部の第一部、第二部が一斉に行なわれる。試験場は、四十五年よりも札幌・東京の二地方で三か所増えて八地方、九か所になった。

金沢（金沢大学教養部）	
名古屋（愛知大学名古屋校舎）	
高松（香川大学教育学部）	
広島（広島商科大学）	
福岡（福岡大学七隈学舎）	
鹿児島（鹿児島大学教育学部）	
札幌（北海道大学教養部）	
東京第一（日本女子体育短大）	
東京第二（日本女子体育大学）	

各学部の募集人員は次の通りである。

	（第一部）	（第二部）
法学部	約五〇〇	約三〇〇
文学部	約四〇〇	約一五〇
経済学部	約五〇〇	約三〇〇
商学部	約五〇〇	約一五〇
社会学部	約四〇〇	約一五〇
工学部	約一〇〇〇	

出願は郵送・窓口持参どちらでも

入試応募者の出願は郵送でも窓口持参でもよい。郵送出願の場合には一月十一日（月）～二十三日（土）の期間内に必着することが求められている。また窓口出願の場合の受付期間は、一月十三日（水）～二十五日（月）である。この出願期間は、全学部の第一部第二部共通だが、ただ地方試験者の出願受付は一月二十三日（土）までに短縮されるので注意を要する。

出願受付場所は、千里山学舎の関西大学会館内の入試事務室である。

出願書類は学部ごとにとり揃えて

出願には、入学願書（本学所定のもの、写真二枚貼付が必要）、調査書（出身学校所定のもの）、検定料（五〇〇〇円）などが必要であるが、これらの出願書類は出願学部ごとにとり揃えて提出しなければならない。本学の二学部以上へ併願する応募者にはとくにこの点を注意することが望まれている。

さらに、受付後に志望学部、学科、試験地、選択科目の変更は認められないので、このことも注意すべきこととなっている。

試験は午前十時から

法、文、商、社会の四学部（第一部、第二部）と経済学部（第二部）は、英語、国語、社会または数学の三科目であるが、経済学部（第一部）は数学と社会の両方が試験科目になっているため四科目になる。

工学部の試験科目は、英語、数学、理科（物理B、化学B）である。試験は、各学部、各試験場とも午前十時に開始されるが、九時三十分には指定された試験場に、必らず受験票を携行して、入場することが求められている。試験開始後三十分以上の遅刻者には、その科目の受験が許可されないという厳しさも例年通りである。

合格発表は二月十三、十四日

合格者の発表は、社会、商、法学部は二月十三日（土）また工文経済学部は二月十四日（日）にそれぞれ午後一時から行なわれる。

▼編集後記▼

大学の研究が専門化を深めて狭い領域に沈殿することへの反省として〝総合化〟〝共同化〟の動きが求められている。本号では、四年前から地道に共同研究に取り組み、今夏には学界の定説を書きかえさせるような「蜂の巣遺跡」の発見・発掘を行なった下筌・松原ダム総合学術調査団を紹介することができて非常にうれしい。その成果が集大成される日が待ち遠しい。

前号で報じた「公害問題研究会」の設立も学問の総合化への努力のあらわれだが、その幹事である沢井教授（法）に「公害」に関する〝三冊の本〟をご案内いただいた。参考になると思う。

また私立大学の直面する財政難をめぐり、わが国の私学助成制度をどう考えるかを述べていただいた今井常務理事、高木教授（経）のご論稿も、われわれを考えさせるだろう。

はやいもので藤本助教授（法）が亡くなってから二カ月になろうとする。藤本先生を追悼する玉稿を法学部長・池垣教授にお寄せいただいた。藤本先生は、広報委員でもあって、本紙のためにご努力いただいたので、非常に身近な方だった。謹んで冥福をお祈りする。

関西大学通信もこの十四号で年を越す。新春一月、また元気でお会いしたい。（と）